ミツバチ科学 19(4): 177—180
Honeybee Science (1998)

インターネットのミツバチ その3 アピモンディアに参加する

中村　純

今号で特集したように，来秋，カナダのバンクーバー市で第36回の国際養蜂会議 Apimondia（アピモンディア）が開催される．ちょうど西暦2000年を目前としているので「21世紀の養蜂（"Beekeeping in the New Millenium" は字義通りでは新千年紀の養蜂とスケール大きく訳すべきだろうか)」を旗印に広報活動が行われている．当然，インターネットの利用の歴史が長く，末端利用者もけた外れに多い北米ではインターネット上でのこの会議の予告が多くの養蜂家や関係者に利用されているのは間違いないだろう．

通常，Apimondia に参加している各国の養蜂団体を通じてその会員に開催が紹介されるというのが一般的な開催通知で，養蜂団体が会員向けの雑誌を出版しているところでは，そのような雑誌が宣伝媒体として機能する．日本では(社) 日本養蜂はちみつ協会が発行する「日蜂通信」がある意味での公式な宣伝媒体である．もちろんそれ以外の養蜂関連業界や学会なども独自に情報を集めて，雑誌や学会誌などを通じて多くの人々に情報の再配布，拡大配布を行う．加えて，Apimondia 自体が前回のアントワープ大会でインターネットを使った広報活動の拡充を打ち出しており（ミツバチ科学 18巻4号参照)，これに応えて会議の主催国が充分な情報をホームページに掲載することで，以前ならなかなか情報に接することのなかった人々を含め，いつでも最新の会議開催情報が入手可能になる．

すでに他の学術会議では印刷媒体よりもインターネットのような電子媒体による情報伝達手段に依存する事例も増えつつあり，発表論文の要旨や，参加登録もインターネットや電子メールを使って済ますことができるようになってきた．講演要旨などを電子メールで集めることで要旨集を作る上で大変な省力化がはかれるので，今後ますます電子媒体への依存は深まるだろう．

インターネット上の Apimondia

国際養蜂会議の現在の公式ホームページ (http://www.apiservices.com/apimondia/apimondia_us.htm) は，養蜂普及活動団体「アピサービス Apiservice」がインターネット上に展開する養蜂関連サイトの集大成的なリンクサイトである仮想養蜂ギャラリー Apiservice Virtual Beekeeping Gallery (http://www.apiservices.com/index_us.htm) のメニュー (図1) から，"Organizations & Services" を選んで入るようになっている．ここに掲載され

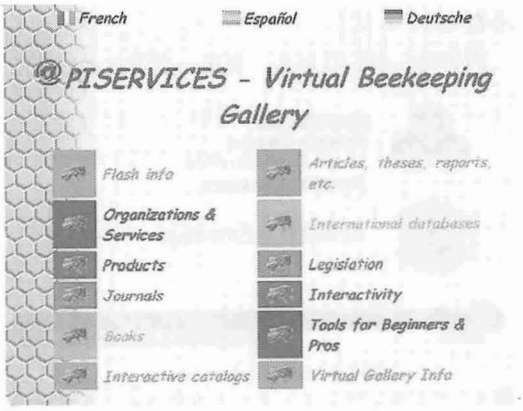

図1　アピサービスのホームページメニュー（英語版）4か国語が利用できるようになっている

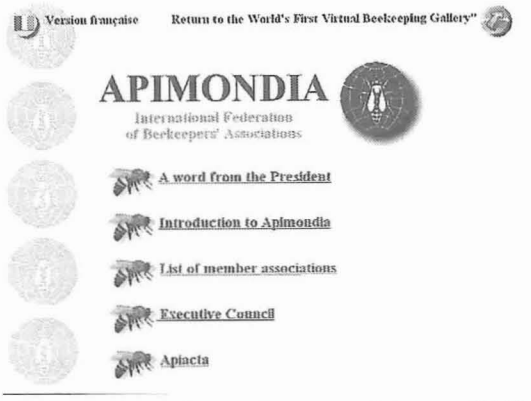

図2　アピモンディアのホームページメニュー（英語版）フランス語版も利用できる

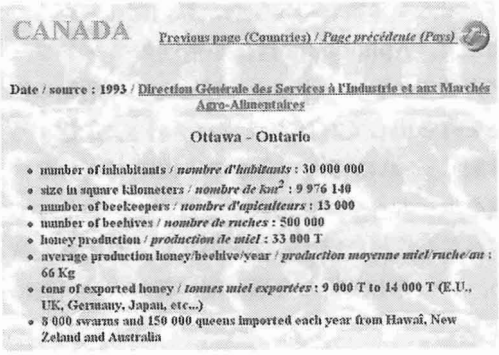

図3　カナダの養蜂事情（英仏2か国語で表記）

ていることで他の養蜂関連サイトからリンクで入りやすくなり，会員以外のかなり多くのインターネットユーザーの目にとまりやすいというメリットがある．Apimondiaを選んで入った最初の画面は図2に示すような簡単なものだが，わかりやすく，それなりに必要で有用な情報源となっている．最初の画面では「会長あいさつ」，「アピモンディアの紹介」，「参加団体一覧（掲載されている56団体の中に日本養蜂はちみつ協会も含まれる）」，「組織委員会」，「機関誌アピアクタ」，「刊行書籍」，「過去の会議一覧」，「第34回ローザンヌ大会の決議文」，「第35回アントワープ大会の決議文」，「ローザンヌ大会での入賞者一覧」，「アントワープ大会での入賞者一覧」，「世界のハチミツ市場」，「各国の状況」，「養蜂博物館（日本では現在玉川大学ミツバチ科学研究施設だけが掲載されている）」，「CODEX（FAO/WHOによるハチミツの合同食品規格）」といった項目を選択できるようになっている（図2では上部のみを表示した）．

ちょっと海外の養蜂事情を知りたいというときには「各国の状況」をみるのがよい．ここに掲載されている情報は，たとえば日本のところでは，人口，国土面積，耕地面積，養蜂家数，蜂群数，ハチミツ生産量，蜂ろう生産量，ローヤルゼリー生産量，花粉生産量，年間蜂群当たりハチミツ生産量，ハチミツ輸出量（主要相手国），ハチミツ輸入量（主相手国）となっている．カナダのところでも，項目には大差ないが，生産物がハチミツだけである点，蜂群や女王蜂の輸入数が記載されているなど，限られた項目にも各国の特徴が現れている．国によっては情報がやや古い（カナダについては1993年現在の統計，図3）．また何も情報がない国については開いたダイアログボックスが入力を受け付けるので，オンラインでの情報収集もねらってはいるようだ．「世界のハチミツ市場」は各地域または主要国の生産量，輸出量，輸入量を1991年からの5年間分の統計で示してあるが，情報としてはまだ不充分な感は否めないが，調整中とのことで今後に期待したい．

このような項目のほかに，各種のApimondia主・共催の会議案内や，今後の大会開催情報が参照できる．現在，開催されることが決まっている3か国が公表されていて，次回36回大会の開催地カナダと，一つ飛んで38回大会開催予定地のスロベニア（http://rcul.uni-lj.si/~bfjanko/ congress/main.html）の独自のホームページにリンクできる．第37回の南アフリカについてはまだ準備されていないようである．

インターネット上のカナダの養蜂

カナダで開催されるApimondia99のホームページ（http://www.apimondia99.ca/）はこのアドレスを見ればわかるように，あるいはスロベニアやApimondia本部のそれと比較して，明らかに大会向けに用意し，誰でも思いだして入力できるアドレスにしたことがうかがえる．つまり広報という面でのインターネットの位置づけをよりいっそう強く打ち出したといえるだろう．

内容はしかしながら，実務一点張りといって

図4　アピモンディア・カナダ大会のホームページから．第1回案内は4か国語で取り出すことができる

よい．現在は第1回案内が公開され，追加情報を含めて大会の開催自体については充分な情報量であるが，カナダに目を向けさせるような，現地の養蜂事情やミツバチ，ハチミツについてはほとんど触れられていない（図4）．その上，スポンサーとなっている企業などのホームページへのリンクはあるのに，養蜂事情を紹介するサイトは残念ながらリンク先に含まれていない．

この記事はApimondiaを機会にカナダへ読者をお誘いする目的もあるので，情報検索を駆使してたどり着いた，カナダの養蜂事情を知ってもらえるサイトを紹介していきたい．

アメリカに較べると少ないが，それでもいくつかの関連サイトが見つかった．中でも特筆すべきはRon Miksha氏（34歳まではカナダとフロリダの間を2000群のミツバチを移動させる養蜂家，その後大学で地球物理学を専攻して現在は地震学者という経歴も特筆すべきだろう）による「養蜂家のホームページBeekeeping : The Beekeeper's Home Page」(http://ourworld. compuserve. com / homepages / Beekeeping/right.htm) であろう．このサイトは氏の16年間の養蜂業の経験や人脈を背景に，有用な情報をふんだんに含んだ養蜂情報ステーションとなっている．トップページは季節の蜂群の写真つきでウィットに富んだ表現での近況報告になっている（図5）．さらに図6に示したようなメニューがある．Beekeeper's Meeting and Events（養蜂家の会議と催し物）には，北米を中心にミツバチ関連の会議などが網羅されていて，来年のApimondia 99も予告されている．リンク集Great Place to Bee on the Webは500近いリンク先を有する相当に充実したものになっている．しかしこのサイトの魅力はなんといっても更新頻度が高く，分量も多いNew in Beekeeping News（ニュース集）や，Were you Wondering???（電子メールでの質問に答えるページ）の存在であろう．電子メールでの取材に応じてくれたMiksha氏によれば，一日に10通以上の電子メール（60%がアメリカから，10〜15%がカナダ国内，残りはその他の地域から）が届くそうである．

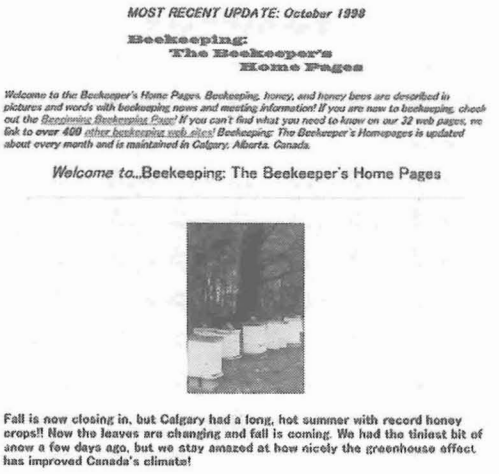

図5　Miksha氏のホームページ．10月のカルガリーの養蜂場風景．今年は夏が暑くハチミツは記録的に採れたが，これは温室効果でカナダの気候が改善？したから

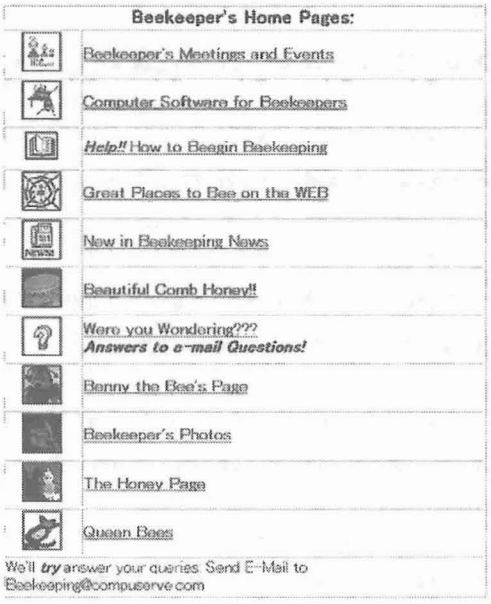

図6　同メニュー　自作のアニメーションアイコンの動きがかわいらしい

昨年からは中国，韓国，マレーシア，日本などのアジアからの問い合わせも急増している．また開設後3年間で90000件以上のアクセスがあったが，ニュースとリンク集の人気が高く，多くの人が毎月一度はニュースのページをアクセスするリピーターであるという．その人々が見るニュースの内容に関しては，独自のものもあるようだが，詳細についてはアメリカで出版されているDadant社（http://www.dadant.

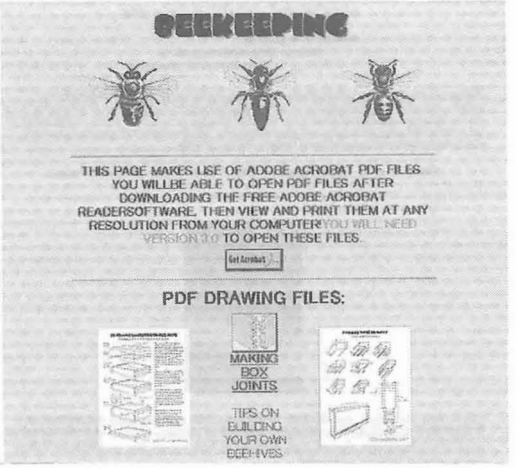

図7 Birkey 氏のホームページ．巣礎模様を背景にした画面では，巣箱の設計図面が取り出せる．

com /）の American Bee Journal や A. I. Root 社（http://www.airoot.com/）の Bee Culture といった雑誌を読むようにと書かれてあるので，たったそれだけの記述ながら，両誌の読者を増やしたにちがいないと思えた．質問の回答集はテーマごとに分けられ，少ないながらもかなり実用的なものになっている．個人的には Beekeeper's Joke's Archives（ジョーク集）も気になる存在である．

政府の公式な養蜂関連情報は Apimondia99 の公式スポンサーである農業省のホームページ（http://www.agr.ca/）にあった．特に重要なのはカナダにおけるハチミツ生産量統計のページ（http://www.agr.ca/misb/hort/honey.html）で，1987 年以降の州ごとのハチミツ生産量，養蜂家数，蜂群数の推移に加え，ハチミツの輸出入について統計資料が掲載されている．また，アルバータ州政府農業省のホームページ（http://www.agric. gov.ab.ca/index.html）も，同州が行ったアカリンダニの防除法の調査報告書などを閲覧したり，昨年度版ではあるが同州の養蜂の紹介したページ（http://www.agric.gov.ab.ca/agdex/ 000/ 0002500 h. html）を読むこともできる．

このほか，Allen Dick 氏の Allen's Honey Bee Home Page（http://www.internode.net/HoneyBee/ beespage.htm）には養蜂家が自分の技術や管理について電子メールでの情報交換ができるようにした Honey Bee Discussion Page が設けられている．また，Barry Birkey 氏の Beekeeping（http://www.birkey.com/BLB/beekeeping/obba. html）からは，PDF 形式ファイル（Adobe Systems 社の開発した Portable Document Format で電子文書配布用のデータ形式）になった巣箱や他の蜂具の設計図面を取り出すことができるようになっている（図7）．この中には蜂具・蜂群の販売者も，カナダとアメリカについて代表的なところを紹介してある．特にオンタリオ州の養蜂協会に属している販売者の一覧が掲載されていて，その中の一つ The Bee Works 社がホームページ（http://www.muskoka.net/~beeworks/）を持っている．そこには自社開発した D. E. 式巣箱（換気装置を備えた蓋付きの巣箱）の紹介や，通常のラングストロス式巣箱の蓋を D.E. 式に改良するキットのほか，ダニ抵抗性の女王蜂の説明が掲載されている．

必ずしも多くのサイトがあるわけではないのは，かなりの範囲でアメリカの情報が使えるからだろう．北米ゾーンということでは，やはりダニの被害など共通の問題点を抱えており，相互に情報交換を密にしている印象は受けた．養蜂を営む上で雑誌を参考にしようという意識が，あるいはそれを通じて何らかのネットワークに参加しようという意識が定着していることは，多くのホームページが種々の養蜂雑誌などを紹介していることからも明らかである．加えて自分たちのホームページの情報が多くの人の役に立つようにとの意志がホームページの内容や掲載の工夫からよく伝わる．多くのホームページで扱われることから，カナダの養蜂家の関心事が，アカリンダニの被害と防除，冬期の蜂群管理，パッケージビー（量り蜂）や女王蜂の入手に関するものであることもたやすく理解できる．

いくつかのホームページを渡り歩きながら，カナダらしい養蜂を感じ，電子メールのやりとりをしただけで，まだ会ったことのない情報発信者たちにぜひ来年会ってみたくなった．

（次号につづく）